

## 学生特集

## 新潟市民病院 副院長 血液内科

## 高井和江先生をお訪ねして

## 【高井和江先生 ご略歴】

昭和52年 新潟大学医学部卒業  
県立がんセンター新潟病院  
内科研修二年間  
昭和54年 新潟大学医学部第一内科入局  
昭和58年 琉球大学医学部第二内科医員  
昭和60年 新潟市民病院血液内科赴任  
平成22年 新潟市民病院 副院長

Q1. なぜ医学部に進学されたのですか。  
医師は女性が社会で自立してやっていけて、営利目的ではない仕事という印象を抱いていました。命を救う人のために役に立つ、尊敬できる職業だったので、進学できるのなら医学部に行きたいと思っていました。

Q2. がんセンターでの研修について教えてください。

がんセンターでは診療科の間の壁が少なく、現在のスーパーローテーションのような形でいろいろな診療科を回りながら研修ができるだろうと思いついて研修先を選びました。興味を持っていた膠原病の患者さんも診ていて、若い女性のSLE(全身性エリテマトーデス)の患者さんが薬剤投与の微調整を経てよくなっていった様子が印象に残っています。がんセンターや市民病院といった市中病院では、診療科を超えた相談・カンファレンスがいやしく、複数の科の先生の指導が受けられるメリットがありますね。

Q3. 血液内科を選ばれた理由は何か。

学生時代、顕微鏡で血球を見る機会に興味を持ちました。手先が不器用で、手術や細かい操作をするよりも、生体全体をこらえて治療をするイメージのあるリンパ腫や膠原病といった内科的な疾患にひかれました。がんセンターで研修をした関係もあり、化学療法や薬物療法である程度治療

ができる分野に関心がありました。内科以外では放射線科も考えたのですが、これには自分で診断できる能力をつけたいと思ったこと、CTが臨床で使われ始め、画像診断が飛躍的に発展した頃に医師になったことが影響しています。

Q4. 琉球大学では何をされていましたが、

琉球大学に異動したのは、理学部出身の夫について行ったからでした。沖縄にはATL(成人T細胞白血病)が多く、夫はATLと寄生虫との関連を研究していました。皮膚科でもATLを多く扱っていて、診療科を超えて連携できたという希望を持ちながら私はATLの患者さんの診療をしていました。沖縄は離島が多く、具合の悪い患者さんの転院時に飛行機で付き添ったこともあり、現地の方の人柄の良さに触れたことがとても印象深いです。

Q5. 女性医師として働いてきて感じることはありますか。

私が働き始めた当時は女性医師も男性と同じように仕事をすることが求められ、自分でもそうあるべきだと思っていました。私は二人の娘がいて、



高井先生を囲んで

今は二人とも医師として働いていますが、子育てには実家の母の助けを借りていました。現在女性医師支援という、正規職員でも育児短時間勤務(育短)制度が利用できるなど仕事と家庭の両立を支援する流れになっていて、市民病院にも育児や病児保育、子供が就学するまで当直を免除する制度があります。こういった支援はもちろん大切ですが、時間に拘束されず仕事をしたい女性医師もいるのではないのでしょうか。そのような先生方にとって実家の母のように子供を安心して頼める存在があれば、より仕事で活躍できますし、男性医師も過重労働をしないで済むでしょう。そこで、保育サポーターバンクという制度を医師会で提案しています。現在のライフワークバランスの考え方に逆行するかもしれませんが、絶対的に医師が足りない現状もあり、女性が仕事をしたいと思ったときにサポートできる仕組みができると思います。近年、医師会で男女共同参画フォーラムや講演会が頻繁に行われていますが、男性女性ともに仕事、家庭での時間がバランスよく持てるようになるのが理想です。

Q6. 血液内科の診療・治療について教えてください。

主に悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、白血病・骨髄異形成症候群を治療しています。一番多いのは悪性リンパ腫で約半数を占めています。他にも頻度は少ないですがITP(特発性血小板減少性紫斑病)、再生不良性貧血、血友病といった出血性疾患も扱っています。治療として、以前は自己末梢血幹細胞移植やCHOPメインの化学療法が中心でしたが、分子標的治療薬の登場により治療の方法や成績が変わりつつあります。市民病院は低悪性度B細胞性リンパ腫に対するゼウアリン療法を行う県内で数少ない施設です。

これは放射性同位元素を結合した抗CD20抗体を静注し、腫瘍細胞に抗体を結合させ、標的の細胞のみを攻撃する方法です。飛距離が短いβ線を出すアイソトープを利用してあるので、一般病棟で治療を行っても害がありません。腫瘍が再発したときの地固め療法として使われています。

Q7. 副院長としてどういった活動をされていますか。

副院長は複数いるのですが、私は医療管理部で医療安全・広報広聴・治験・臨床研究などに関わる仕事をしています。特に医療安全に力を入れ、医療事故の調査や事例検討を通じて、多職種で話し合っ安全な組織を作ることが心がけています。また医療メディアエーションを導入し、患者さんと医療者の話し合いの場を作ってお互い納得できるようにし、想定外のことが起これば直ちに患者さんに説明するようにしています。チームとして最善の医療ができるようにしたいというのが副院長としての想いです。医療事故調査制度ができ、予期しない死亡事例の事故調査をすることになっていますが、医療安全に関わる立場として、医師と患者さんとの信頼関係が改善され、医療不信がなくなることを願っています。

Q8. 医師としてのやりがいは何ですか。  
苦労したときほど患者さんが元気になったときは一緒に頑張ってきたと思えます。たとえ患者さんが亡くなられても、お互いに精一杯を尽くし、納得した形でお見送りできてよかったと思えることもあります。研究ではなく臨床を中心にやってきたので



副院長室にて

症例報告をする機会が多かったのですが、2010年にTAFRO症候群という新たな疾患を報告しました。この疾患は診断基準が決まり、これから難病指定を受けようと活動しているところですが、根拠のある診断をして治療するために、診断基準が作成されるのは重要なことです。金沢医科大学の正木教授が中心になって全国から合致する症例を集め、類似点を持つ病気であるキャッスルマン病の班会議と合同で研究会を開いています。日常の臨床で遭遇する患者さんは教科書どおりではなく、今まで正しいとされていたことが違うのではないかと気づかせてくれることがあります。TAFRO症候群の報告から、ひとつの疾患の概念ができてくると、患者会とともに活動できるまでになったことに臨床医としてやりがいを感じています。

Q9. 学生にメッセージをお願いします。

私にはできなかったことですが、若いうちに留学をするのいいと思います。英語は国際的に活躍するうえで必須で、実践力をつけるためにも海外で勉強する必要があります。市民病院では35年ほど前から中国のハルビン市第一病院から医学研修生を受け入れていて、昔は日本語で指導していたのですが、今は英語でコミュニケーションをとっています。日本人は他のアジアの人に比べて海外で貪欲に勉強・研究する意欲が乏しいと言われるので、積極的にチャンスを作って挑戦してほしいです。ある程度研究に没頭する機会を作るとは活躍の幅を広げることにもつながるでしょう。将来、臨床と研究どちらの道に進むとしても、世界に出ていくという覇気をもって頑張ってください。

取材を終えて

女性医師として活躍されている先生の体談や考えを聞くことができ、とても勉強になりました。特に、臨床医として長年多くの症例を見られたからこそその功績である新たな疾患概念の確立や、医療安全に向けた想いには感銘を受けました。お忙しいなか貴重なお話を聞かせていただきありがとうございます。

(4年 鈴木理紗子 上野幸恵  
安田慎太郎)